



法務史料
展示室だより

第57号(令和5年3月)

法史見聞帖



CASE 08

石川五右衛門の「釜煎」と、大釜のゆくえ

「五右衛門風呂」という言葉の由来になった石川五右衛門は、実在の人物とされています。豊臣秀吉が天下を治めていた文禄3年(1594)、のちに「五奉行」の一人となる前田玄以によって五右衛門を含む窃盗団が逮捕され、五右衛門は京の三条河原で釜煎の刑に処されました。この話が江戸時代に脚色されて、現在の私たちがもつ「石川五右衛門」のイメージができあがったわけです。

なお、五右衛門に対して行われた釜煎という刑罰は、油や水を入れた大釜に人を入れて煮殺す残虐なもので、日本では戦国時代に一部の地域で行われていました(氏家幹人『江戸時代の罪と罰』など)。

ところでこの大釜、明治39年(1906)に再発見されます。同年11月28日付読売新聞の朝刊に、「石川五右衛門を茹でた釜」との見出しを掲げた記事があり、「今年の春監獄事務官の法学博士

一人者として監獄行政を主導した、小河滋次郎その人であったのです。

その後、大釜は監獄協会(のち刑務協会、現在の矯正協会)に保管され、実物や写真が、各地で開催された展覧会に貸し出されて人気を博しました。現在、その釜は失われてしまい、現物を見ることはできません(『刑政』98巻9号)が、記録に伝えられる形状は、本欄に掲げた画像の釜と一致しています。

士小河滋次郎氏が奈良地方を遊展の折奈良監獄の片隅に打捨て、あつたのを発見して東京へ運ばせた」と記されています。すなわち、大釜を再び世に出した人物は、明治期に監獄学の第

今回ご紹介した「釜煎」の大釜の真贋は今となっては検証できませんが、法務省や各地の関係施設・機関には、確実な考証に堪えうる近世・近代の貴重な歴史的史料が多数眠っています。これらの史料を確実に後世に伝えていくこともまた、今を生きる私たちの重要な責務といえるでしょう。



五右衛門の釜煎を描いた錦絵(舞鶴市糸井文庫)



刑務協会旧蔵の釜(矯正図書館所蔵)



『香港巡邏章程 全』

何幸五郎訳 (明治5年、横浜活版社)

本書は、西暦1869年4月27日に制定された香港警察の警察規則を翻訳したもので、神奈川県警察創設のために集められた英国警察に関する参考文献です。訳者の何幸五郎は長崎出身の唐通事 (中国語の通訳) であり、モンテスキュー『万法精理』 (法の精神) を翻訳したことで知られる何礼之の美弟にあたります。

幸五郎は、中国語を習得した後に英語を学び、元治元年の末 (1865) に開港によって通訳業務が多忙となった横浜へ応援派遣されています。維新後明治4年 (1871) に神奈川県に出仕すると、清国人関係の聴訟・断獄事務を担当しました。

当時の横浜居留地では盗犯が頻発し、英国領事ロバートソンは効果的な警察制度や組織を作るために必要な資料を香港から取り寄せて、県令陸奥宗光と交渉しています。本書の原典はその中の一つと考えられています。ちなみに、前号に取り上げたホイートン『万国公法』を翻訳した大築拙蔵は、幸五郎と同時期に神奈川県に出仕し、英国警察の教科書とされる『邏卒勤方問答』を訳しました。

なお、明治5年、神奈川県の邏卒総長の職務を行った石田英吉は香港の警察制度を視察していますが、その報告書には、本書の内容と類似するものがあるとの研究があります。



『香港巡邏章程』の扉



拳銃等の使用に関する項



大築拙蔵訳述『邏卒勤方問答』

近代司法の担い手たち

渡辺 驥

天保7年 (1836) に松代藩士の家に生まれた渡辺驥^{すまむ}は長男であったものの、博徒との交流や放蕩などの素行不良を理由として廃嫡されてしまいます。しかし、佐久間象山に入門したことをきっかけに国内の情勢を学ぶようになります。元治元年 (1864) に佐久間象山が暗殺されると渡辺は出奔し、京都に出て討幕運動に身を投じますが、このときには岩倉具視のもとで活動したといわれています。また、戊辰戦争にも参加しました。

新政府が成立すると渡辺は明治2年 (1869) に監察等を掌る弾正台へ出仕します。明治4年に弾正台が廃止されたことに伴い、以降は司法省に移って官途を歩んでいきます。明治14年に大審院検事長となり、明治19年まで務めました。他にも太政官書記官や元老院議員に就き、明治23年には勅選で

貴族院議員となります。

以上のように政府内の地位を築いた渡辺には茶人としての顔もありました (依田徹「渡辺驥と明治東京—『無物庵』の額字を中心に」)。渡辺は無物庵という茶室を設けるとともに、その無物庵の額字を有栖川宮熈仁親王に書いてもらい、さらに小堀家伝来の茶道具を買い取るなど、茶道界でも目立つ存在であったことが窺われます。一方、横柄な振る舞いのために古風な茶人たちから煙たがられることもあったようで、道具の読み方を間違えて嗤われたエピソードや「茶室に於て毎度大宗匠顔する渡辺氏」との言も伝わっています。

華々しいキャリアをつんだ新政府の司法官僚と、維新後に俄かに名をあげた茶人という2つの像を併せ持つ渡辺は明治の世情を象徴する人物の一人といえるかもしれません。